

回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援の有用性

伊藤 恵美¹⁾ 仙波 梨沙¹⁾ 兼田 絵美²⁾ 松谷 信也³⁾ 上城 憲司³⁾

要旨 本研究では回想法に着目しコミュニケーション技法を用いた教育的支援を作業療法学専攻学生（以下、OTS）に対して行うことで、重度認知症患者デイケア（以下、デイケア）利用者に対する語りかけの量と質がどのように変化するかについて検討することを目的とした。方法は、①デイケア利用者の情報を与えない自由に会話する面談、②回想法に関するビデオの鑑賞、③OTSが求める情報を与え、①と同じ利用者と再面談、④面談終了後、OTSに対して感想等のインタビューの順で行った。結果、OTSがデイケア利用者に対し語りかけた回数は増加した。話題について介入前後を比較した結果、介入後に増加した話題は、家族の話、学校の話、挨拶の話の順であった。また、介入後に新たに追加された話題は、季節の行事の話、おやつの話、健康の秘訣の話の順であった。一方、介入後に減少した話題は、畑の話、デイケアの話、仕事の話の順であった。本研究では、回想法のコミュニケーション技法は、学生等のコミュニケーションスキル向上のための教育的支援ツールとして有用であることが示唆された。

Key words : 回想法, 認知症, 作業療法学専攻学生

I. はじめに

これまで認知症の行動・心理症状（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia：以下、BPSD）に対する非薬物療法のひとつとして、回想法が多くの施設で実施されている^{1,2)}。回想法は、アメリカの精神科医 Butler が提唱したものであり、高齢者が人生を回想することに対して、過去に対する執着や老いのサインではなく、自身の歩んできた人生に意味を見出していく自然な過程であると捉え、うつ病などの精神疾患の治療へと応用した。回想法のこれまでの効果としては、知的機能の改善³⁾、集中力の増大⁴⁾、発語回数の増加⁵⁾、他者への関心の増大⁶⁾などが報告されている。回想法は少人数のグループを組んで展開されることが多いが、個別に行う個人回想法の有用性も示されている⁷⁾。山田ら⁸⁾は、回想法の実践はスタッフのコミュニケーションスキル向上に役立つため、スタッフの教育

効果も期待できることを示している。

一方、作業療法学専攻学生（以下、OTS）は、認知症高齢者と関わる経験がほとんどない状態で臨床実習に臨むため、漠然とした不安を抱いている場合が多い。そのため認知症を呈する患者や利用者に対し、どのように語りかけを行ってよいか戸惑う場面が多く、思ったようにコミュニケーションを図ることが難しい印象を受ける。

そこで本研究では、OTSを対象とした回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援を行い、介入前後に利用者に対する語りかけの量と質の変化を調査することで、教育的支援の有用性を明らかにすることを目的とした。

受付日：令和元年10月1日、採択日：令和2年2月1日

- 1) 西九州大学 リハビリテーション学部
〒842-8585 佐賀県神埼市神埼町尾崎4490-9 TEL：0952-37-9320
- 2) 公立八女総合病院
〒834-0034 福岡県八女市大字高塚540-2 TEL：0943-23-4131
- 3) 西九州大学大学院 生活支援科学研究科
〒842-8585 佐賀県神埼市神埼町尾崎4490-9 TEL：0952-37-9320

II. 方法

1. 対象

A大学に通う3年生のOTS, 男女2名を対象とした。年齢はOTS (男子) が22歳, OTS (女子) が20歳である。

2. 実験方法

1) 活動の内容

B病院の重度認知症患者デイケア(以下, デイケア)スタッフに対し, 比較的コミュニケーション能力の保たれた利用者2名の選出を依頼した。面談場所はデイケア利用者が緊張しないよう個室ではなく, 日中を過ごす共有スペースとした。面談時間は約1時間とし, 利用者のBPSDに留意しながら面談を実施した。

2) 回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援の介入

教育的支援として, 野村らの回想法に関するビデオ^{9,10)}を用いた。ビデオの内容は, グループ回想法を例に挙げ, 以下のようなコミュニケーション技法を用いていた。①リーダーは一人ひとりに目線を合わせる, ②一言, 一言区切りながらゆっくりと大きな声で話す, ③回想に伴う思いを現在や未来に活かすことが大切であるため, 利用者が回想内容を間違えても受容する, ④言葉を繰り返し, 記憶を呼び覚ます, ⑤情緒的・情動的表現を共感とともにグループに伝え直す。また, 故郷・学校・季節・家事・仕事の思い出や健康の秘訣, 生活の知恵, 将来のことなど, 毎回テーマを決め, グループ回想法を展開していた。このビデオを通し, デイケア利用者に対する話しかけ方だけでなく, 視線や間の取り方など非言語的なコミュニケーション技法を学ぶことにより, 学生のコミュニケーションスキルの向上を図ることとした。

3) 調査方法

デイケアを訪問し, 利用者との面談を2回行った。面談はレクリエーション等のデイケア活動のない時間を利用し, 他の利用者も同席するテーブルにOTSも着座し行った。また, 会話時間が60分になった時点で面談を終了とした。

研究プロトコルを図1に示す。①1回目の面談はOTSにデイケア利用者の個人情報を与えず, 自由に会話するように伝え, 約60分の面談を実施した。②1回目の面談終了後に, 回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援の介入として回想法に関するビデオ(第1巻, 第2巻)を鑑賞し, その後OTSに対

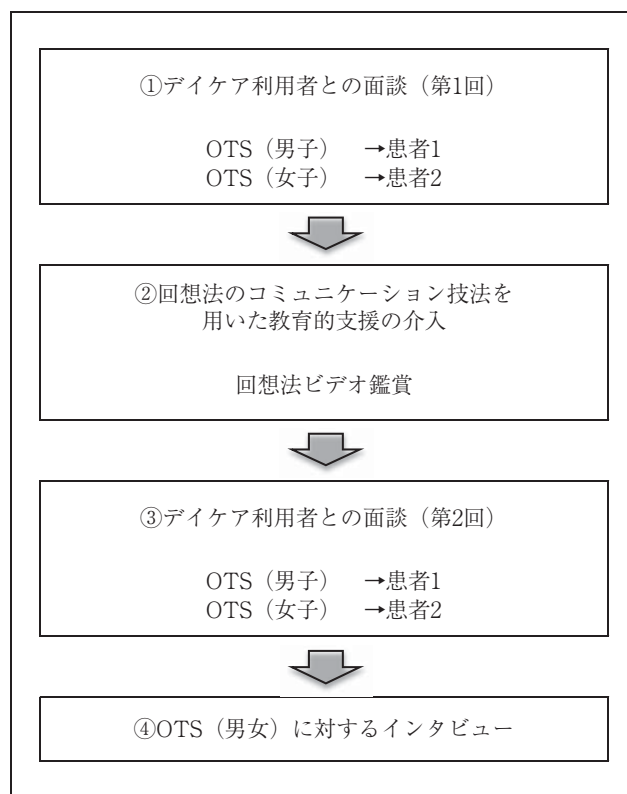


図1 研究プロトコル

してビデオを鑑賞し「重要だと思ったこと」「印象に残ったこと」等の学びについてインタビューを実施した。③2回目の面談は介入の3日後にB病院を訪問し, 1回目の面談と同じデイケア利用者と同様に会話する機会を設け, 約60分の面談を実施した。その際OTSに対し, デイケア利用者に関して欲しい情報がないかを尋ね, 尋ねられた個人名や年齢, 病前の職業等の個人情報を与えた。また円滑なコミュニケーションが図れるよう, 回想法のビデオで学んだことを活かし, 積極的にデイケア利用者へ語りかけるよう指示した。④面談終了後, OTSに対して①~③の介入に関する感想についてインタビューを実施した。

4) 記述データの生成と分析

①, ③の面談と④のインタビューは, デイケア利用者およびOTSに会話の録音許可を求め, 同意が得られたためICレコーダーを用いその内容を録音した。これを音声データとした。次に, 1, 2回目の面談と, 面談終了後のインタビューにおける音声データを逐一文章に転記し, 逐語録を作成した。そして逐語録の内容からOTSがデイケア利用者へ語りかけた回数を数値化し, 介入前後の回数を比較した。またOTSがデイケア利用者へ語りかけた内容を家族の話や仕事の話, 学校の話などにカテゴリー化し, 介入前後で増減した項目と出現した項目, 消失した項目を数値化し, 介入

前後で語りかける内容に相違があるかを比較した。

3. 倫理的配慮

デイケア利用者およびOTSに対し本研究の趣旨を説明し、同意を得た。その後、同意を拒否しても不利益がないこと、いつでも同意を取り消す権利があること、同意取り消し後のデータは、研究責任者が確実に破棄することなどを説明した。

III. 結果

1. OTS が語りかけた回数の介入前後の比較

OTS が語りかけた回数の介入前後の比較を図2に示す。介入前後を比較した結果、デイケア利用者へ語りかけた回数は、OTS(男子)が238回から279回、OTS(女子)が132回から173回へとそれぞれ増加した。

2. OTS が語りかけた話題の介入前後の比較

OTS が語りかけた話題の介入前後の比較を表1に示す。音声データをもとに作成した逐語録をカテゴリー化した結果、その内容は45項目であった。介入前後を比較した結果、介入後に増加した話題は、家族の話(48回から119回)、学校の話(12回から40回)、挨拶

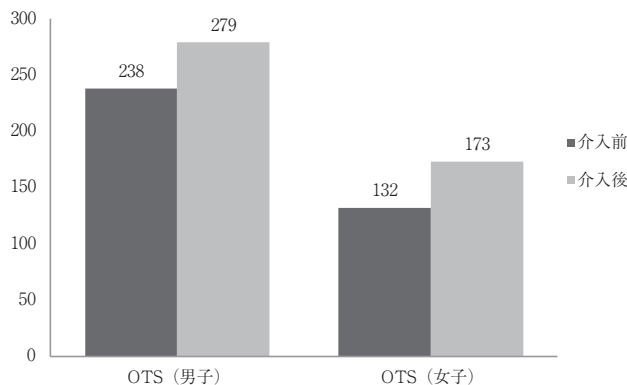


図2 OTSが語りかけた回数の介入前後の比較

挨拶の話(3回から24回)の順であった。また、介入前にはなく介入後に新たに追加された話題は、季節の行事の話(34回)、おやつの話(33回)、健康の秘訣の話(16回)の順であった。一方、介入後に減少した話題は、畑の話(46回から0回)、デイケアの話(40回から3回)、仕事の話(56回から32回)の順であった。

次にOTSの性別の相違による、デイケア利用者へ語りかけた話題の介入前後の比較を図3、図4に示す。OTS(男子)について増加した話題は、家族の話(21回から85回)、おやつの話(23回)、季節の行事の話(18回)の順であった。

表1 OTSが語りかけた話題の介入前後の比較

		介入前	介入後	差
1	家族	48	119	71
2	季節の行事	0	34	34
3	おやつ	0	33	33
4	学校	12	40	28
5	挨拶	3	24	21
6	健康の秘訣	0	16	16
7	手伝い	0	14	14
8	昔の遊び	0	10	10
9	出身	17	24	7
10	果物	0	7	7
11	工作	0	7	7
12	子育て	0	6	6
13	感想	10	14	4
14	食事	6	10	4
15	リハビリ	0	4	4
16	性格	1	4	3
17	薬	0	3	3
18	天気	5	7	2
19	大学	0	2	2
20	住まい	7	8	1
21	観光	0	1	1
22	1回目の面接	0	1	1
23	暮らし	0	1	1
24	洋服	0	1	1
25	畑	46	0	-46
26	デイケア	40	3	-37
27	仕事	56	32	-24
28	壁飾り	20	0	-20
29	学生	16	0	-16
30	友達	11	0	-11
31	季節	19	12	-7
32	地理	12	6	-6
33	時事	5	0	-5
34	年齢	8	4	-4
35	習字	4	0	-4
36	歌	4	0	-4
37	方言	4	0	-4
38	旅行	3	0	-3
39	おしゃれ	2	0	-2
40	買い物	2	0	-2
41	体操	3	2	-1
42	戦争	2	1	-1
43	引っ越し	1	0	-1
44	お出かけ	1	0	-1
45	経歴	2	2	0

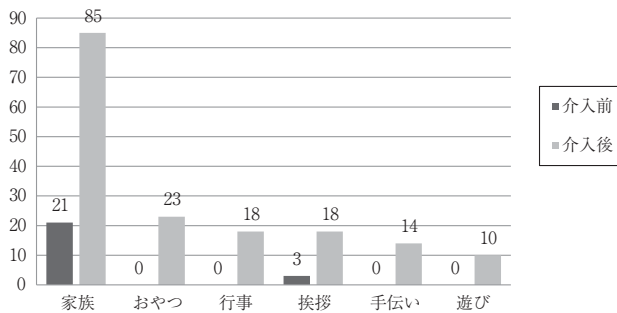


図3 OTS (男子) が語りかけた話題における性別の介入前後の比較

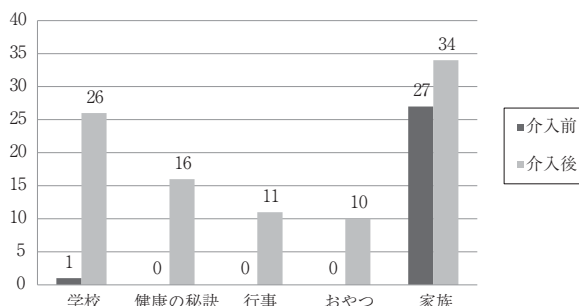


図4 OTS (女子) が語りかけた話題における性別の介入前後の比較

OTS (女子) について増加した話題は、学校の話 (1回から26回)、健康の秘訣の話 (16回)、季節の行事の話 (11回) の順であった。

3. 介入後における OTS へのインタビュー

Q 1. 1回目と2回目の面談で感じ方の違いはあったか。

ビデオを見て、話す話題をいくつか考えていたため話しやすかった。

Q 2. 事前にデイケア利用者の個人情報がある場合とない場合で相違があったか。

名前を事前に教えてもらっていたため、名前を呼びながら話すことができた。また、性格も簡単に聞くことができたことによりイメージが湧き、接しやすかった。情報を聞き、それを掴みとして話題を振っていったため、掴みとしてあった方がいいと感じた。

Q 3. 回想法のビデオや授業 (老年期作業療法学など) で習ったことを取り入れることが可能であったか。

学校や季節の話、ふるさとの話、健康の秘訣など、ビデオで見たテーマを取り入れて話すことができ、介入前より後の方が、会話が弾んだ気がした。また、目線を合わせることやゆっくり話すこと、会話と会話の間を意識することを心掛けた。ビデオを見ていたため、

回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援の有用性

デイケア利用者が話したことを、もう一度伝え直したり、「そうですね」など共感したりするようにした。会話中、キーワードを探すということを考えながら話しかけるようにした。

Q 4. 臨床場面で回想法をどのように活かせると思うか。

会話に困った時に昔の話をするすることで、自分に興味を持ってもらえる。また、コミュニケーションをとりたいたい時、楽しいことを思い出してもらうことで、自分といたら楽しいと思ってもらえ、良いイメージが残ると思う。

IV. 考 察

1. 回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援介入

今回、回想法のコミュニケーション技法を用いた教育的支援の介入によって OTS の語りかけの量と質がどのように変化するかについて検討した。介入前後を比較した結果、OTS は男女ともにデイケア利用者へ語りかける回数が増加した。2回目の面談後のインタビューにおいて「ビデオを見て話題を考えていたため、話しやすかった」との発言が聞かれたことから、ビデオで学んだことを面談に取り入れることにより、デイケア利用者に対し積極的に語りかけることが可能となったのではないかと考える。また介入前は、畑の話・壁飾りの話・学生の話が話題として挙げられたが、介入後はそれらの項目はなくなり、介入前にはなかった季節の行事の話・おやつの話・健康の秘訣の話が新たな話題として挙げられた。1回目の面談で OTS は現在の話題を多く取り入れていたことが示されており、壁飾りの話に関しては、デイケアの壁に飾ってあるものを見ながら話をするなど OTS が話題提供することを模索していることが伺えた。これに対し、今回の介入を行うことにより話題を事前に考えることができ、それを効果的に使うことで、デイケア利用者に対し積極的に語りかけることが可能となったのではないかと推察する。小川ら¹¹⁾は、コミュニケーションにおいて非言語的な要素が果たす役割は大きいと述べている。今回、視線や間の取り方などの非言語的なコミュニケーション技法を学ぶことで OTS の語りかけの量と質が改善された。これらのことにより、回想法のコミュニケーション技法は、支援者のコミュニケーションスキル向上に有用であると考えられる。

次に、黒川¹²⁾は、認知症の初期では、言語的やりと

りを中心に行えるが、中期では長文の理解が困難になることから、写真や音楽を用いる。後期になると写真の認知が困難となるため、食べ物や匂いなどのより原初的感覚刺激を用いて手続き記憶に働きかける等、時期に応じた工夫が必要であると述べている。

本研究では、言語的なやりとりを中心に面談を実施したが、認知症の進行過程においては上手くコミュニケーションが図れない可能性がある。今後は、OTSに対して特に中・重度の認知症高齢者に対する道具使用や非言語的なコミュニケーション技法に関する具体的な指導が必要であると考えられる。

2. 認知症高齢者とのコミュニケーションのあり方

本研究では認知症高齢者と円滑なコミュニケーションを図るために、利用者の過去の生活史や現在の興味関心等の情報を事前に聴取し、それらを会話に盛り込むことの重要性が示された。上城¹³⁾は、認知症の人の記憶に残っている「キーワード」、例えば妻の名前や自宅住所等を事前に聴取しておき、それらを上手くコミュニケーションに活かして対応することが重要であると述べている。デイケア利用者の現在と過去の情報をできる限り多く事前に把握することはコミュニケーション能力の拡大に留まらず、BPSD出現時の対応にも有用であると考えられる。

次に、松澤¹⁴⁾は、グループ回想法の進行上の注意・ポイントとして、①敬意を持って接する、②ネガティブな発言・沈黙も大切にすること、③構造を一定に保つ、④非言語的な部分にも目を配るの4点を挙げている。OTSは臨床実習の場において、利用者と積極的に話さなければという思いから、一方的な語りかけや利用者の発言を妨害してしまう場合がある。そのため、非言語的な部分に目を配ることや沈黙、間を大切にすることなどを指導することにより、OTSの戸惑いも軽減し、利用者によりよいコミュニケーションをとることに繋がるのではないかと考える。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたB病院のデイケア利用者の方々、スタッフの皆様に厚くお礼申し上げます。

引用文献

1) 藤生大我, 須田昇司, 山田早綾香・他: 介護老人保健施設利用者に対する脳活性化リハ5原則に基づいた回想法実施充実度と効果の関係～効果的なグループ回想法を実施する

ために～. 認知症ケア研究誌2, 2018: 85-92
 2) 津田理恵子: 行動観察スケールを活用した認知症高齢者への回想法の効果測定. 行動療法研究37(2), 2011: 77-90.
 3) 佐々木直美, 上里一郎: 特別養護老人ホームの軽度痴呆高齢者に対する集団回想法の効果の検討: MMSE, 行動観察, バウムテストを用いて. 心理臨床学研究, 2003, 21: 80-90.
 4) 中野明德, 坂下敦史: 痴呆性高齢者に対する回想法的アプローチ; ある老人デイケア施設における試み. 福島大学教育実践研究紀要42, 2002: 55-62.
 5) 野村豊子: 回想法とライフレビュー; その理論と技法. 中央法規出版株式会社, 東京, 1998.
 6) 吉山容正, 渡辺晶子, 河田政之・他: アルツハイマー病における回想法を取り入れたデイケア反応例と非反応例の比較検討. 老年精神医学雑誌10, 1999: 53-58.
 7) 落合真弓, 斎藤正彦: 痴呆性疾患を対象とした回想法; グループホーム入居を自ら決断した一事例の心理的プロセスを支えた回想法. 老年精神医学雑誌15, 2004: 511-517.
 8) 山田紀代美, 西田公昭: 介護スタッフが認知症高齢者に用いるコミュニケーション技法の特徴とその関連要因. 日本看護研究学会雑誌30, 2007: 85-91.
 9) 野村豊子: 回想法～思い出を今と未来に活かして～第1巻「回想法とは何か」. 中央法規出版株式会社, 1997.
 10) 野村豊子: 回想法～思い出を今と未来に活かして～第2巻グループ回想法の実際1「セッションの流れ」. 中央法規出版株式会社, 1997.
 11) 小川敬之, 竹田徳則: 認知症の作業療法; エビデンスとナラティブの接点にむけて. 医師薬出版株式会社, 2009.
 12) 黒川由紀子: 認知症の心理療法. 日本老年医学会雑誌43, 2006: 309-310.
 13) 上城憲司: 認知症の人との接し方と家族指導. 臨牀と研究91, 2014: 87-91.
 14) 松澤広和: 認知症への非薬物療法; 回想法. 老年精神医学雑誌19, 2008: 468-473.